

## 来島海峡急流観潮船みどころ案内

### ■ 来島海峡大橋



大島と四国本土を結ぶ世界で初めての3連つり橋来島海峡大橋です。全長およそ4 km。

大島側から来島海峡第一大橋960m、真ん中が第二大橋1515m、どべが第三大橋1570mときさんじい長さなんよ。

塔は海面から184mよいよ高く、橋げたの高さは65mもあって、大きな船でも楽々と通り抜けれるんよ。

この橋の鉄・コンクリートはぎょうさんつこうとるんよ。

鉄はおよそ10万t、東京タワーの25基分とついなんよ。

コンクリートは48万m<sup>3</sup>とミキサー車10万台分とよ一けつこうとるけん、9年もの年月がかかって、やっと平成11年5月1日に開通したんよ。

また、このしまなみ海道は、自動車道だけでなく、自転車でも歩いてでも渡れる橋として脚光を浴びています。

サイクリングやウォーキングのイベントも数多く行われ、広く人気を集めています。

この平成11年完成した世界初三連吊橋、来島海峡大橋の愛称が一般公募されました。その中から選ばれたのが「くるくる大橋」です。来島の「くる」と人が来るの「くる」、さらにくるくる回る渦潮のイメージを伝えるものとして選ばれました。



## ■ 武志島

武志島（むしじま）は、面積 0.07 km<sup>2</sup>の小さな島で、西に中渡島、馬島、北西に小武志島（こむしじま）、北東に毛無島（けなしじま）がある。中世の古文書に「務司島」の名を目にすることができる。付近の中渡島や小武志島、毛無島とともに村上水軍の砦が築かれていた。

明治から大正にかけて、桃の栽培が試みられたことがあったが、現在は無人島となっている。



## ■ 中渡島 （なかとじま）

かつて村上水軍の拠点のひとつだった中渡島。

その城跡は現在、白い灯台（中渡島潮流信号所）になっています。

白い灯台は、明治42年（西暦1909）日本で最初につくられた潮流信号所です。このとき使用されたのが腕木式（うでぎしき）といい、赤い丸と黒い四角の標識で情報を知らせてくれるんよ。

満ち潮で潮の流れの向きが南の時は黒い四角の板が上、引き潮で潮の流れが北向きの時は赤い丸の板が上になります。今の腕木式信号機は二代目で、明治42年新設当時から平成2年まで81年間使用された初代信号機は現在今治市内の公園に保存されています。

また、現役の潮流腕木式信号機は、世界でも来島海峡だけにしか残ってないようです。



## ■ 馬島（うましま）

来島第二大橋と来島第三大橋の間にある、巨大な橋脚になっている島が馬島です。この島を境にして、来島海道は中水道と西水道の2つの航路に分かれています。ここを通る大型船は、潮流の向きで、どちらを通るかが決まる世界でも珍しい変則航路で知られています。

馬島の名前の由来は馬の形ではなく、昔今治藩の馬の放牧場があったからなんです。古くは「牧島」といわれ、伝説ではこの島には野生の青い馬と栗毛の馬

の2頭が生息し、植えた種や収穫物を荒らしたといえます。そこでこの馬を退治したところ、作物ができるようになりました。

江戸時代には、島全体に牧草が生い茂り、放牧に最適の土地であったため、今治藩主のため、名馬を多く育てたといいますが、多くは失敗し、松山藩の野間郡の農家で多くが育てられました。

現在は花の島。来島海峡の水温は冬でも高く、馬島は対岸の今治市よりも平均3度は気温が高いといえます。きっかけは路地咲きのマーガレットを1月はじめ冬の季節に見つけた頃から。島に電気が通ってないころから苦労を重ね、花卉栽培がはじめられました。現在は至る所にビニールハウスがあり、色とりどりの花が島を染めていきます。

島の南側の小さな岬には、「馬島神社」があり、その鳥居をくぐり境内の裏側に同居するようにある白い鉄筋コンクリートの灯台は、「ウズ鼻灯台」で1938年（昭和13年）に造られました。

#### ■来島・村上水軍

正面の島が来島です。周囲わずか1kmの小さい島です。来島村上水軍の本拠地として知られています。

島全体が水軍城跡。本丸、一の丸、二の丸、出丸などがあり、水軍の長は通常、対岸に住み、戦の際に潮流の急な特徴を生かし、敵の近寄りやすい海城として活用したといえます。

戦国時代には、実際に敵の攻撃を受けたこともあったようで、これを防ぐための郭（くるわ）や石垣などの遺構が、現在も島に残されています。また、海岸部の岩礁には棧橋跡や船を繋ぐピット跡と思われる柱穴が多く残されています。

水軍達は、海の戦いにおいて、大名から傭兵として雇われることもありましたが、生活の糧は、物流の大名脈、瀬戸内海の海上輸送に依存していました。このため、海賊が拠点とした海の城跡からは、近年、貿易陶磁器がたくさん出土しています。

また島には黙って切るとお腹が痛くなるという伝説の矢竹があり、難攻不落の城は神のご加護によると信じられています。

今でも、島全体が神の島として崇められとんよ。

ほやけん島にはお墓がひとつもなく、すべて対岸の大浦に葬られとんやって。

渡船場近くに佇む神社が来島八千矛神社です。今の松山道後の湯築城の河野氏

の創建と伝えられ、祭神ならびに社殿が海の方角を向いている。

ここ来島水軍と河野氏の関係は深く、来島村上氏の全盛期を築いたのは、通康とその子・通幸である。河野通直の娘婿となり、河野氏の重臣として軍事・運輸に力を発揮しました。

その昔、この辺りは潮の流れや風向きも絶えず変化して、航海には大変な苦労がありました。

そこで、海人族（あまぞく）と呼ばれるこの航路を熟知した地元の人たちが水先案内人となりました。

それぞれの島に関所を設けて航行する船の安全を守る代わりに料金を徴収。

この関所を無視したり契約を違反したりする船に、時には海賊行為にまで及びました。

他の海賊との武力抗争で実力をつけ兵力も貯えた彼らは、やがて海の武士集団「水軍」と呼ばれるようになりました。

村上水軍の始まりです。

この辺りは三島村上水軍の基盤のひとつであり、来島村上水軍が手中に収めていました。

村上水軍は能島水軍、因島水軍そして来島水軍の3水軍からなり、海上交通の要所である3島を制覇。

つまり、瀬戸内海を完全に制覇したことになり、村上水軍は巨大な力を持つようになりました。

戦国時代「海の豪族」の名にふさわしく、めざましい活躍を歴史に刻みました。今のしまなみ海道そのものが水軍だったのです。

また、関が原の戦いの後には三島村上水軍のうち唯一、ここ来島水軍だけが、大名となり大分県の豊後森藩1万4000石の藩主でした。そのとき姓を久留島に改姓しました。わが国の児童文化の基を築き、童謡「夕やけこやけ」の作詞者でもあり、「日本のアンデルセン」と称された久留島武彦は、その殿様の直徑子孫です。



## ■ 波止浜湾

水軍の歴史はこの地域の人々に進取の気風を与えました。

この波止浜湾はかつて日本で最初に入浜式塩田が築造され、全国有数の塩田産地で知られ、江戸時代には塩買い船や窯焚き燃料の松葉・石炭の運搬船で賑わいました。

塩田と港町で栄えたこの湾は「伊予の小長崎」と言われるくらいの盛況ぶりでした。

その後、海の要衝という地の利を生かし海運業が盛んになりました。

また、海運業成長の刺激を受けて塩田の浜旦那らが資材を出し合い、明治35年（1902）に愛媛県最初の洋式造船所をこの地につくりました。

塩田の豊かさと、来島海峡の地の利が、この地に海運業と造船業を根付かせ、日本一の海事都市「今治」がここに誕生。

そして、発祥地が今ご覧いただいている波止浜湾です。

長さ1km、幅300mのハコガタ湾は大小のクレーンがそびえ、船の修理建造の光景を見ることができます。

建造実績は日本でトップクラス、世界でも5本の指に入る今治造船グループを始め、日本屈指の造船企業があります。

波止浜だけで日本船舶のおよそ15%、今治に本拠を置く企業全体ではおよそ25%以上の船を建造しています。

今治は、日本一の造船産業集積地となっています。



## ■ 小島（おしま）

正面に見える島が小島です。周囲約3キロの島です。

島の形が琵琶に似ていることから、「びわ首」という地名も残っているほど。

残念ながら船から見ることはできませんが、日露戦争当時、ロシア海軍の侵攻にそなえて日本は要塞を築きました。明治33年から2年間の突貫工事で、当時の30万円の巨額を投じ、28センチ砲の砲台・司令塔・兵舎・弾薬庫・発電所など数多くの施設が造られました。

この28センチ砲6門は日露戦争の旅順の鷄冠山北砲台攻撃のとき、旅順に運ばれ不落といわれた旅順攻略に重大な役割を果たしたとされています。

この施設は日本唯一のものと言われ、英国式工法による石・赤煉瓦造りの施設が当時の形を保ちながら残されている貴重な史跡です。

専門家からも高い評価を得ています。

こうした施設が当時のまま残っています。

史跡をめぐる遊歩道は2500本以上のヤブツバキと1000本以上の桜が植えられていて春の瀬戸内の名物となっています。

散策者には花のトンネルをくぐるような感触を与えてくれるよ。

平成6年5月に「風の顔らんど・小島」が創設されました。子供たちが主役となり自然とのふれあいや地元の人々の交流を通じて愛情や自由な発想や想像力を育むというもの。自然観察やキャンプ、農業漁業体験など親子のふれあいの場として子供たちの自由な遊びの場として楽しい思い出が作れる場所です。

「風の顔らんど」設立には、飛鳥涼・小田和正・カールスモーキー石井・玉置浩二・徳永英明・浜田麻里・山本潤子が協力し、★「僕らが生まれたあの日のように」（作詞：飛鳥涼、小田和正）をキャンペーンソングとして提供。

この歌は、日本版「ウィ・アー・ザ・ワールド」（We Are the World）ともいわれ、当時人気の高かったアーティストで結成され、WELCOME BABY キャンペーンソングとして使用されてきました。

この「僕らが生まれたあの日のように」は、オリコンチャート最高2位となり65万枚を売り上げ、その収益金で「風の顔らんど・小島」を創設されました。



## ■ 来島海峡・急流ポイント

ここ来島海峡は「一に来島、二に鳴門、三にくだって馬関瀬戸」とうたわれたように鳴門海峡・関門海峡と並ぶ日本三大急潮のひとつ。

荒々しい潮流は干満差の最大時に10ノット時速18km、落差2mにも達します。

大潮の時には直径10m以上の八幡渦と呼ばれる巨大な渦がいくつも発生します。この八幡渦は、対岸の大浜の八幡神社の大祭のときに島から来た神輿が、海を渡る途中、この渦に巻き込まれて沈んでしまったことからこの名前がついたそうです。

またごらんの通り、橋の下の海峡は大きく3つの水路に分かれています。

大島側から東水道、真ん中が中水道、そして今治側が西水道です。

船の通航水路としてはとても狭く、湾曲しており、難所としても有名です。

また水路は一方通行となっていて、潮の流れの向きによって通航できる航路が変わります。

この航法は「順中逆西・じゅんちゅうぎやくせい」と呼ばれ、潮の流れと同じ方向に航行する時は中水道、潮の流れと反対方向に航行する時は今治側の西水道を航行することとなっています。

これは世界で唯一、ここ、来島海峡だけに採用される法律です。

この、来島海峡は1日におよそ1,000隻の船が通行。

東京湾入り口、浦賀水道と同じくらいの混雑振りです。

今治側の山の上にあるグレーの塔の建物が、複雑な海上交通の安全を24時間体制で管理する来島海峡海上交通センターです。

海の男たちも恐れる急流。かつ複雑な海底の地形により海中で立体的に交差する潮の流れと、さらに水温の差が激しいこと。このことが私たちに恵みをもたらしました。

そう魚なんです。厳しい海に揉まれ育った魚介類は身が引き締まって、おんまく旨いけん。

しかも、砂底に岩礁帯と、複雑な地形は魚介類の格好の住処となり、小魚や小動物も豊富で、良い食物連鎖の形態がつくられています。

良い物をいっぱい食べて、運動もしっかりやる。そうすれば、良い体がつくれる。魚も人間も同じやね。

特に来島海峡の鯛は、明石の鯛と並び、全国的に有名なんよ。

どちらも潮の流れが速く、水温の差が厳しい場所で育った鯛。

厳しい環境が身の引き締まった美味しい魚を作る証拠といえるんやね。

藩政時代、ここ今治藩には、「鯛奉行」が置かれたといい、幕府に鯛の塩辛や乾燥させた鯛を献上しとったんやって。

時の将軍が来島海峡の鯛で舌鼓を打ったに違いありません。  
鯛の美味しい季節は春。桜鯛と呼ばれるように桜の季節、鯛の背中が桜の花びらが散ったように斑点が出来るのは、お腹に子を抱えている証。  
その頃には、鯛を目当ての一本釣りの船がわんさか寄ってきます。ぜひ、機会がありましたら、鯛釣りにチャレンジしてみてください。  
あなたも「鯛奉行」になれるかもしれませんよ。



# 「僕らが生まれたあの日のように」

USED TO BE A CHILD

君は来るか 僕の腕に  
この空は青いか 見つめてみないか

愛する意味をつかみたいから 未来を話したい  
夢から降りるように 世界に降り積もるように

何も疑わない すべて受け止めて  
君はここへ生まれてくる

僕らが生まれたあの日のように

光の姿で 僕らも心をもらったけど  
どれだけ本当の 愛に育てたの 渡してゆけるの

誰かをつつんでどこまで駆け抜けたの

君はいつの日にか 僕らの時を越えて  
風の顔で 走るのだろう

高い空 見果てぬ夢 砕ける波 はじける夢  
君は来るか ここへ来るか 僕の腕の中に

何も疑わない すべて受け止めて  
君はここへ生まれてくる

君はいつの日にか 僕らの時を越えて  
風の顔で 走るだろう

何も疑わない すべて受け止めて  
君はここへ生まれてくる  
君はいつの日にか 僕らの時を越えて  
風の顔で 走るだろう